

楠（くすのき）のあれこれ

“小田高校 11 期生っぼさ”残している NS コンビ

私は水曜日ごとに、早朝辻堂を発って小田原の「和みの会」のラジオ体操の会に参加しています。会長の浅田絢子さんが望月郁文追想展に寄せられた追想文によると、「和みの会には 5 名も小田原高校 11 期生がおられたのですが、この一年間で、市川陸雄さん(6 組)、根岸俊郎さんに次いで望月郁文さん(3 組)に亡くなられてしまって寂しい限りなのですが、中澤秀夫さん(7 組)と佐々木洋さん(3 組)が辛うじて“小田高校 11 期生っぼさ”を発揮してくださっています。」という状態になっています。

落葉樹でもないのに落葉する常緑樹の楠

小田原の実家筋にオンボロ N-Wagon を停めて、ラジオ体操会場(城内小学校跡地の二の丸広場)に向かう途中の三の丸小学校(我が母校の本町小学校と城内小学校が統合したもの)のあたりで、いつも道路をきれいに清掃してくださっているオジサン(オジイサンの私がこう呼ぶのはヘンテコですが)と出会います。いつものように「お掃除していただいて有り難うございます」と声をかけてから、お手元の塵取りに目をやって「それにしてもすごい落ち葉ですね」と発すると「そうなんですよ、楠の木、今の時期に限らず落ち葉してくるのですよ。」という声が返ってきました。それを聴いて私は「えっ、楠って常緑樹で、落葉しない木じゃなかったの!？」とビックリしました。

葉っぱが一枚一枚入れ替わるから全体として“常緑”なのだ

家に帰ってから改めて百科事典を調べてみますと、常緑樹は「葉の寿命が 1 年以上あり、年中葉をつけている樹木」とありました。「そうか万物流転の世の中で、葉っぱだけ永久に茂っているなんてことはなくてちゃんと落葉しているんだ」と改めて悟る私。更に「葉の寿命は環境条件によっても変化しクスノキのように 1 年で毎年すべての葉が作られるものがある」という一節がありました。そうか、葉っぱが一枚一枚入れ替わるから全体として“常緑”を保っていることができるんだな。歴史の街である為か小田原は楠が多くその姿の鮮やかな緑色に見とれることが多いのですが、「常緑樹の落葉期は、広葉樹では春の新葉展開時が多く、針葉樹では生長が休止する秋から冬にかけてが落葉期になる。」のだそうですよ。要は、ともに落葉するのですが、落葉期をもたず葉の交代が連続的に行われ、緑の葉が常にある樹木が「常緑樹」で葉の無い時期があるのが「落葉樹」だったんですね。

「奇（くす）しい木」なのだ楠の名前の由来は

次いで「クスノキ」についてみると、本来「楠」という字は中国のタブノキを指す字で、中国名は、「樟」または「樟樹」なんだそうですね。そう言えば、「材から樟脳が採れる香木」とされていましたね。英語ではカンファー・ツリー(*camphor tree*)と呼ばれますが、これはクスノキの枝葉を蒸留して得られる無色透明の固体で防虫剤や医薬品等に使用される樟脳の英名カンフルまたはカンファーに由来しているようですよ。クスシ(薬師)またはクスリノキ(薬木)から和名クスノキが由来したという説もありますが、その上に、香り高く、寿命が長く、古くから各地の神社などにも植えられて巨木になる個体が多いのですから「奇(くす)しい木」という意味でクスノキと名付けられたという説を支持したくなりますね。

楠のもとで今生の別れを告げた楠木正成

楠でキがついたのですが、鎌倉時代末期の名武将・楠木正成(くすのき まさしげ)とその息子・正行(まさつら)にまつわる伝承を謳った唱歌「桜井の別れ」の歌い出しは♪青葉茂れる桜井の♪になっていますが、あの茂れる青葉は楠の葉だったのではないのでしょうか。右の写真をご覧ください。迫りくる10万の大軍を迎え撃った天皇方の武将・楠木正成が死を覚悟し、桜井の駅(現:大阪府三島郡島本町桜井1丁目)で息子に今生の別れを告げた場面に登場するのは楠でなければいけないと思います。



もっともっと楠に学ばなければ

もう一人楠姓では、元巨人ジャイアンツに楠安夫というキャッチャーがいたのですがご存知でしたでしょうか。球歴を見ると、1938-1942 巨人、1947-48 阪急、1950 西鉄、1951-54 巨人、1955 大洋とありますから、私の楠捕手との初めての出会いは物心がついて熱烈な巨人ファンになった後の1951-54年の頃だったのではないかと思います。通算14年間の本塁打数が22本で大した強打者でもなかったのに何故「楠捕手」の記憶が残っているのでしょうか。大変な読書家で、大量の蔵書を誇っていたと言われるだけの理知的な風貌を写した画像が残っていますが、テレビがなかった当時のことですから、理知的な風貌に惹かれてファンになったわけではありません。思うに、これは私が“楠木の木のお世話になった”せいではないかと改めて思っています。小学校時代に自転車練習をしている時に、停止も回避も出来ず直進した私に“ぶつかってくれて”止めてくれたのが本町小学校の校庭に植わっていた楠だったのです。今でもこの楠は三の丸小学校の校庭で、何を誇るともなく立ち続けていて、私が校門前を通り過ぎるごとに黙礼するところになっています。そう、取り立てて目立つことがないのにどこか頼もしい楠、これをキャッチャー楠のイメージとかぶらせていたのかもしれないですね。年を経ても変わることがない若葉の緑の若々しさ。もっともっと楠に学ばなければと思いを新たにしています。

(完)